

留学生と日本人学生との混成授業における実践報告

— 異文化コミュニケーション能力育成に向けて —

原 沢 伊都夫

【要 旨】

日本に留学した外国人学生にとって、異文化コミュニケーション能力の向上は非常に重要な課題である。日本での留学生生活が成功するかしないかは日本文化に上手に適応できるかどうかにかかっているともしえるからである。筆者は日本語授業の中で、日本語上級者を対象に異文化能力開発を目的とした授業を行った。このクラスは留学生だけでなく、日本人学生も入った混成型の授業であり、留学生と日本人学生が文化の違いを話し合い、お互いを刺激し合うことで、よりよい異文化コミュニケーション能力の向上を目指したものである。授業の最後に実施した無記名アンケートをもとに、この授業の効果を検証するとともに、今後の授業改善について考察することにする。

【キーワード】 異文化コミュニケーション 学習者主体 参加型学習 実践的学び

1. はじめに

大学において日本語教育に携わる我々にとって、日本という異文化の中で生活する留学生の異文化適応について無関心ではられない。実際日本への留学が実現したものの、様々な理由により途中帰国した留学生をこれまでに何人も見ている。もちろんこれらの帰国の理由のすべてが日本文化への不適応とは言えないが、もう少し異文化に対する認識が深ければ帰国という結論には至らなかったのではないだろうかと思える留学生もいることも確かである。倉地（1993）は、大学の日本語・日本事情教育に関して、1980年代後半からそれまでの伝統的な教師主導の授業展開を超えた学習者主体の教育の試みや目的文化の直接的な接触の機会や相互交渉の場面の量的拡大を図ろうとする試みなどを紹介している。

そのような新しい方向性の中で、筆者も留学生に対する異文化コミュニケーション能力向上に向けての取り組みを行っている。それは、日本語教育の中で、異文化コミュニケーションをテーマにした授業を行い、留学生の異文化に対する認識を高める努力をしていることである。このクラスは参加型であり、学習者主体であり、日本人学生との混在クラスであるという点で、倉地の言う「伝統的な教師主導の授業展開を超えた学習者主体の教育の試み」の1つであり、授業の中で日本人学生という目的文化の人間と直接的に話し合う機会を提供するものでもある。もちろん留学生は日本に住んでいるわけであるから、日常茶飯事に日本文化と接していることにはちがいない。しかし、日本文化の接触が多いからと言って、必ずしも容易に異文化理解が深まるわけではない。日本文化に適応が進んでいると思われる留学生に聞いてみると、ある程度の理解が深まるまでには数年を要していることが多い。私の目から見て、数年たっても適応していない学生もいる。倉地（1993）も、「接触の拡大（量）が、必ずしも接触の深化（質）に結び付くとは限らない。」と述べてい

る。

このことから、授業の中で異文化コミュニケーションを扱い、留学生の異文化に対する意識を深めることは非常に重要であると思われる。今回筆者が試みたのは、異文化コミュニケーションの理論と留学生の日常的な体験とをつなげ、異文化に対する認識を深める試みである。倉地が言うように「接触の深化を促し、個々の人間の内的成長につながるような異文化とのかかわりを、個々の学習者の中に体現させるような教育活動」を目指すものである。以下、このような目的のもとに実施した授業について報告するとともに、受講者アンケートにより、授業の効果についても検証することにする。

2. 授業の概要

授業科目名は「日本語5-b（日本語総合）」であり、その内容を「異文化理解入門」として2008年前学期（4月～7月）に行った。レベルは上級（日本語能力試験1級程度）であり、単位が2単位留学生には認められる。日本人学生は正式な授業ではないため、単位は出ない。留学生と日本人学生との議論や討論が中心となるクラスであるため、レベルとして上級に設定したが、多くの異なる国籍の留学生が参加する意義があることから、中級後半レベル（日本語能力試験2級程度）の学生も受け入れた。その結果、延べ参加人数で30名、そのうち留学生が14名、日本人学生16名という構成になった。日本人学生は単位が出ないことから、完全にボランティアとしての参加であり、同じ時間帯にクラブ活動や学部の行事などが入る場合、そちらを優先するため、半数の8名ほどが常時参加するという状況であった。留学生の国籍は、韓国5名、フランス3名、カナダ・ドイツ・ロシア・ベトナム・中国・ポーランドが各1名という内訳であった。

授業内容は以下のとおりである。

回数	日付	内 容
1	4 / 17	異文化コミュニケーションとは
2	4 / 24	文化とは①
3	5 / 1	文化とは②
4	5 / 8	異文化と認識
5	5 / 15	異文化適応
6	5 / 22	違いに気づき、その背景を考える
7	5 / 29	自分を知る
8	6 / 5	ノンバーバル・コミュニケーション
9	6 / 12	異文化体験（シミュレーション・ゲーム）
10	6 / 19	異文化トレーニング
11	6 / 26	差別を考える
12	7 / 3	世界の価値観を知る
13	7 / 10	（会議出席のため休講）
14	7 / 17	異文化摩擦を考える
15	7 / 24	まとめ（最終エッセイの提出）

これらの内容について、参加型手法（シミュレーション、ロールプレイ、ブレインストーミング、カルチャーアシミレーター、自己診断チェック、ディスカッションなど）によって、グループワークを中心に授業を展開した。さらに、学生の学びが深まるように、3回に1回の割合で小論文を課し、どのような学びや気づきがあったかを教師がチェックし、コメントを記して返却するという形式をとった。これは、一般に「ジャーナル・アプローチ」と呼ばれるものと似ているが、授業内容を実生活やこれまでの体験と結びつける視点でもって論文形式でまとめるという点で、ノートのやりとりを通じ何でも感じたことを気楽に書くという「ジャーナル・アプローチ」とは異なっている。しかし、書くことによって、頭の中を整理し、自分が学んだことや気づいたことを具体化するのを教師がサポートするという点では、同様な効果を期待している。ここでは学生によって書かれた内容の詳細については紙面の関係上割愛するが、全体的な観点からこのアプローチによる授業の有効性についてアンケート調査とともにそこに書かれたコメントを中心に検証していくことにする。

3. 参加学生への評価

この授業の評価は小論文5回（80％）と出席（20％）とした。小論文は基本的に3回の授業が終わった時点で、その内容について書くという形式で4回課し、最後の5回目は全体をまとめる形での論文を求めた。配点は、最後になるにつれて高くなるようにした。1回（5点）、2回（10点）、3回（15点）、4回（20点）、5回（30点）である。これは、これまでの経験から最初の論文では学習者が理論と実践を結びつける視点が弱いため、深い考察ができないが、回数を重ねるうちに向上していくことから、学習者の有利になるような配点になるように配慮した結果である。出席を20点としたのは、授業中の様々な活動に参加することがこの授業にとって大きな意義があることから、出席点も評価の対象としている。今回参加した学生の小論文を含めての結果は以下のとおりである。なお、日本人学生は評価の対象外であるため、ここには記されていない。

	学生の国籍	小論文					出席点	総合評価
		1回 (5)	2回 (10)	3回 (15)	4回 (20)	5回 (30)		
							20	100
1	韓国A	4	9	13	16	27	19	88(A)
2	韓国B	5	8.5	12	16	27	20	89(A)
3	韓国C	4	9	12	17	27	20	89(A)
4	韓国D	5	8.5	15	18	28.5	19	94(S)
5	韓国E	5	8.5	15	18	28.5	20	96(S)
6	フランスA	3	8	12	16	24	20	83(A)
7	フランスB	5	8	13	16	27	19	88(A)
8	フランスC	—	—	—	—	—	19	—
9	カナダ	3	8	12	17	27	20	87(A)
10	ドイツ	4	8	11	17	—	20	60(C)
11	中国	4	8.5	12	18	28.5	20	91(S)
12	ロシア	3	8	13	15	24	19	82(A)
13	ベトナム	3	—	11	14	24	20	72(B)
14	ポーランド	3	8	12	15	21	19	78(B)

S (90～)、A (80～89)、B (70～79)、C (60～69)、D (0～59)

14人中、S評価が3人、A評価が7人、B評価が2人、C評価が1人、評価の出ない出席だけの学生1人となっている。授業内容を理解し、異文化理解を自分の生活体験をつなげることができれば、少なくともA評価を与えるように配慮している。今回の学生の中では、ドイツとベトナム、ポーランドの3名がB評価以下であるが、ドイツとベトナムの学生は小論文をすべて提出しなかったことによる減点が影響している。ポーランドの学生は最後の論文の提出が1週間遅れたために減点なり、それがA評価に届かなかった理由である。したがって、これらの学生は実体験と理論とを結びつける小論文をすべて提出していれば、成績としてはA評価になっていたであろうと思われる。

4. 参加学生からの授業評価

学生に対する教師の評価に対して、学生自身による授業アンケートを最終授業において実施した。留学生12名と日本人学生9名の合計21名から無記名での回答を得た。最初に全体の結果を紹介し、その後アンケートに書かれたコメントとともにその内容の詳細を検証する。

留学生（14名）の回答

	とても良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
全体評価	7	6	1	0	0
能力の向上	2	9	3	0	0
体験型学習	9	5	0	0	0
グループ学習	7	4	3	0	0
小論文	1	5	7	0	0

日本人（7名）の回答

	とても良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
全体評価	5	2	0	0	0
能力の向上	3	2	2	0	0
体験型学習	5	2	0	0	0
グループ学習	3	4	0	0	0
小論文	6	1	0	0	0

*留学生、日本人学生へのアンケートの「能力の向上」についての設問では、「とてもそう思う」「そう思う」「たぶん」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」が選択肢となっている。

1) 全体評価（講義全体に対する感想）

留学生の半数と日本人学生の7割が「とても良かった」と回答している。これは全体の57%である。「良かった」とするものが、留学生6名と日本人学生2名であり、「とても良かった」を入れると、肯定的な回答は95%に上る。全体で1名の留学生が「普通」と答えている。このことから、ほとんどの参加学生がほぼ満足する授業であったということが言えるだろう。ここに書かれたコメントを留学生から紹介する。「今まで経験できなかった授業で新鮮だった」「とても知的で刺激的授業」「自分を振り返る契機となった」「いろいろな人と自分の文化や考えていることについて話し合うことができよかった」「議論内容として面白かった」「このような講義があって、みんなの授業態度も良かったし、いい経験になった」「自分の意見に誇りを持って出せた。それまでは、人前で自分の意見を出すのが怖かった」「ずっと前から異文化について考えていたが、このコースのおかげでいろいろと思いだせた」「みんなが参加する授業で良かった」。日本人学生のコメントは、「外国人の視点で日本または日本人を見ることができて面白かった」「留学生の友達ができ、異文化に接するチャンスができた。また、私たち日本人について考えさせられるきっかけとなった」「他の文化について知れたのも良かったし、他の国の人の目から見た“日本人”の特性やコミュニケーション等についていろいろな発見があった」「異文化コミュニケーションについて大切なことやよりよいコミュニケーションをするにはなど、とてもよく学べた。また、表面的ではなく深い問題にも触れていて良かったです」「毎回いろいろな題材を取り上げ、趣旨も多様で面白かった」「日本人同士では気がつかない習慣を一部であるが知ることができた」「今までの自分の考えに異文化の考え方を取り入れることによって、新しい世界観が広がりました。ただ、ステレオタイプの授業のときはすべての国民があてはまるわけではないので、伝えるのが難しかった」

留学生の中に自文化や自分自身を振り返るというコメントがあるのに対し、日本人学生の多くは外国人との交流を通して彼らの考えや感じ方を知ることができたというコメントが多かった。これは、日常的に異文化に身を置いている留学生とこの授業の中で異文化を感じる日本人との違いであり、ある意味で日本人学生にとって留学生以上に刺激のある授業となったことが推察される。

留学生の中で一人だけ「普通」と回答したものがいたが、残念ながらコメントは書かれていなかった。ただ、その他の質問事項に対する回答から、もっと理論的なことを勉強したかったことがうかがえる。この授業の狙いは理論の学習ではなく、理論をどのように実生活とつなげていくかということであるため、理論的な学習を希望する学生には不本意だったかもしれない。このような学生には、授業の目的や狙いをしっかりと周知させる必要性を痛感した。その他にもこの授業の目的をよく理解していないと思われる学生もいることから、その点で改善すべき点があると感じた。

2) 能力の向上（今回の講義をきっかけに、皆さんの異文化コミュニケーション能力を高めることができますか。）

留学生では「とてもそう思う」が2名、「そう思う」が9名で、「たぶん」が2名であった。日本人学生は、それぞれ3名、2名、2名となっている。全員が何らかの意味で異文

化コミュニケーション能力の向上を認めているが、「たぶん」と消極的に回答した者も4名いる。まず、留学生の肯定的なコメントから見てみる。「異文化の授業では自分の異文化に対する態度を見直すことができ、良かった。異文化について様々な知識を得ることができてよかった」「これからの人生に役立つと思った」「自信を持った。他の人の異文化がわかって、適応する態度でいたい」「まだ、完璧とは言えないが、いろいろ役に立った」「いますぐでなくても、今回得た知識はいつか実ると思う」「まだみんな若いからたぶんあまり異文化コミュニケーションについて考えていなかったかもしれない。きっと高まったと思う」「いろんな人たちとの話を聞くきっかけとなった」「異文化についてもう一度考えてみるきっかけとなった」。日本人のコメントは、「日本人がどう見られているのかを知ったことで、今後異文化の人とどう付き合っていけばいいのかということがわかった。様々な考え方があったので、少しでも異文化摩擦は減らすことができると思う」「文化の違いによる衝突が起こった時、フラストレーションが溜まりがちだけど、このような授業で得た知識はその衝突を和らげ、どう対処すればいいか考える余裕を与えてくれた(←実体験)」「カードゲームや差別の授業が特に心に残りました。やはりその人の気持ちになって考えることが大切なのだとわかりました」「普段の生活の中では異文化について考えることはない。いろんな知識を得ることができました」「このような授業は初めて参加したし、留学生とこんな近い距離でコミュニケーションをとったことがなかったので、とても能力を高めることができたと思う」「この授業できっかけをもらった感じでした。これからその能力を高めるためにもとても良い足がかりになりました」。留学生のコメントには異文化だけに限らず、周りの人とのコミュニケーションや自己の向上という視点があるのに対し、日本人学生のコメントからは異文化理解への向上が強く感じられる。これも設問1と同様に、この授業において異文化を感じている日本人と普段から異文化に身を置く留学生との温度差なのかもしれない。

異文化能力向上についての消極的なコメントは、次のようなものである。「ほんの少しだけど異文化に接することができたので、多少は高まったと思う。けれども逆に自分の発言などが相手の文化のタブーに触れはしないかと気になってしまうようになった」「いつも頭ではわかるが、実際にどうかはぶつけてみなければ(わからない)」「高めることができるのは、異文化コミュニケーション技術だと思います」最後の2つのコメントは留学生によるものだが、異文化理解にとって必要な要素をテクニックだと考えていることが気になった。この授業の目的はこれまでの自分のコミュニケーションのあり方を内省し、人間的成長を促すことによって、よりよいコミュニケーションを構築していくことであるが、その目的が必ずしもこの学生には浸透していなかったことがうかがえる。いずれにせよ、何らかの形で異文化能力を向上するきっかけとなっている点で、授業自体の目的はある程度達成されたと考えることができるだろう。

3) 体験型学習(シミュレーション・ロールプレイ・ブレインストーミング・カルチャーアシミレーター・自己診断チェック・ディスカッション・その他の様々な活動について、どのように感じましたか。)

この授業形態については多くの参加者から非常に肯定的な回答を得た。留学生の9名が

「とても良かった」5名が「良かった」とし、日本人学生もそれぞれ5名、2名と、体験型の学習スタイルは全員から好感をもって受け入れられたことがわかる。留学生のコメントは次のようなものである。「特にシュミレーションゲームを通して今まで気づけなかったことが明らかになった」「これらの活動によっていい雰囲気が醸し出せた。とても楽しかったです」「自分のことを知ったのが大きな収穫でした」「自分のことを点検する機会になった。欠点がたくさんあったので、今から少しずつ直していこうと思う」「これからもあってほしい」「おもしろくて授業を活性化した」「シミュレーションが一番記憶に残ります」「授業がACTIVEになるのでいい。PASSIVEすぎる授業は好きではない」「自分が新しいところに行った時、どんなふうにするのかがわかった」「理解することに役立った」「面白かったです」。日本人は以下のようにコメントしている。「シミュレーションの授業でやったカードゲームは異文化に直面したときの意外な自分の潜在的なものを知れてよかった」「自分と異なる文化を持つ人々と話すことができ、いろいろな発見があった」「自分のこれまでの経験を振り返るきっかけになり、自分の感情や考え方を再確認しながら授業に取り組んだので、新しく学んだことへの納得度を高め、自分の中で強く印象づけることができた」「ロールプレイはとても面白かったです。演じた人は気持ちをより理解できるので、良かったと思います」「講義より体験型のスタイルのほうが記憶に残りやすいし、受け身態勢ではないのでよかった」「講義形式よりも自分で行うことで異文化の違いをより実感できるものでした」「劇を見たり、実際に参加できる授業形式だったので、普通の聞くだけの授業より五感に働きかけるものが多くてよかった」。留学生も日本人も積極的に授業に参加し、授業内容を楽しむことができた点を挙げている。学生自体が主体的に授業に参加できたところが多く、多くの学生から評価された点だと思う。

4) グループ学習（毎回異なるグループで話し合い、学びを深める学習スタイルについてどのように感じましたか。

体験型の学習においては基本的にグループ活動が中心となる。授業の目的として、グループによる話し合いにより、異文化理解を深めていくことにあったが、これについては、留学生の7名が「とても良かった」4名が「良かった」3名が「普通」と回答し、日本人は3名が「とても良かった」4名が「良かった」と答えている。体験型学習についての回答と比べると、評価が下がっている。特に留学生の3名が「普通」と答えている点が気になった。コメントを見てみると、多くの学生が毎回異なるグループでいろいろな人と意見交換できたことを良かった点として挙げている半面、同じ人がいつも意見を出さず傾向にあることや話が授業内容からそれてしまうことがあるといったマイナス面も指摘されている。これについては、グループ全員が最初に必ず意見を言う前から、全体の話し合いをするように指導したり、討論内容が授業内容からそれないように注意深くグループの議論を見守ったりするなどして、改善する必要性を感じた。ここに記述されたコメントは以下の通りである。「事前に自分の意見を表したり、自分の体験について話したりする機会があり、よかった」「いろんな人（国が違う人同士）と話ができたよかった」「いつもの学生との話し合いじゃないから、いろいろ勉強になりました」「話し合いをしたがあまり勢いがなかった」「いつも意見を出す人が出さずという傾向があったと思います」「いつもの友達の意見で

はなく、他の人の意見を聞いて良かったと思う」「チームになって話をする機会の少ない人もいたが、この授業でいろんな人達と話ができて良かった」「毎回異なるグループと異なる人、いろんな人の話を聞くことができてよかった」「話し合いはコミュニケーションですから、コミュニケーションの中で異文化を理解し、比較することができます」。以上が留学生のコメントで、以下に見るのが日本人学生のコメントである。「いろんな国の留学生と話ができ、各国の文化や特徴を学ぶことができて、とても有意義な体験ができた。おもしろかった」「多くの人を覚えることができ、また自分を覚えてもらえるのでよかった」「いろいろな意見を聞くことができて面白かった。また、同じ国の人でも異なる考え方を持っていたりするので、毎回違うグループで個々の人と話すことで、国のステレオタイプはステレオタイプにすぎないと再確認することができた」「留学生は様々な私の知らない経験を持っているし、多文化のことも話してくれたので、いろいろと知ることができました」「自分たちでグループを決めると偏りが出てしまうので、グループ分けや毎回異なるグループになれてよかった」「毎回グループが変わるのも、いろんな人と話ができよかったです。話がそれてしまったときになかなか戻らないのは難点ですが」「毎回異なるグループにすることにより、いろんな国の人とコミュニケーションをとることができたし、みんなと友達になることができたのでよかった」。

5) 小論文について(小論文を書く目的は、授業で扱った異文化の題材について、身近な生活や経験と関連させながら、気づきや学びを促し、それをまとめることで、自分の学びをより具体化させることにあります。小論文についてどのように感じましたか。)

本人の気づきや学びを具体化するだけでなく、授業として学生を評価するためにも留学生には小論文4回と最終的なエッセイを1回、合計5回課した。これは、授業内容が多岐にわたり、それぞれの内容を学生自身の実生活と関連して学んでほしいというねらいであった。出された小論文には学びを深めるヒントとしてコメントを付し、翌週の授業時に返却した。これについての学生の反応はそれまでの質問と比べかなり批判的なものが多かった。「とても良かった」とする者が1名、「良かった」と回答したものが5名、「ふつう」とした者が7名あった。作文を提出しないで参加だけした学生は無回答であった。肯定的な回答の多くはこちらの意図を理解し、授業内内容を実生活と関連付けて学びとしているコメントが多くみられた。それに対し、「ふつう」と答えた学生の多くが、書く内容に窮しているというコメントが多かった。毎回異なる授業内容と実生活との関連性を考える目的であったが、それが必ずしも学生には伝わっていないことが感じられる。したがって、そのような学生のコメントには作文の練習として良かったというような異文化理解の目的とは異なる効果を上げるものが多かった。裏返せば、筆者の意図する「異文化理論と実生活の関連付け」がしっかりと定着しなかったことを意味する。その点で、授業のありかたに改善点があると感じた。

日本人学生には小論文は課さなかったが、この課題についてどう思うかを質問したところ、7人中6名が「とても良かった」、1名が「良かった」と答えていて、実際に書いた留学生と大きな違いが見られた。おそらく次の2つの理由が考えられるだろう。まず、実際には書いていないため、授業内容と実生活とを関連させて書くという難しさが理解できて

いないということがある。もう1つの理由は、留学生には日本語で論文を書くということに対する苦手意識があり、日本人学生と比べると大きな努力が必要であるということであろう。

では、この設問に対する参加者の意見を見てみよう。まず、留学生のコメントから紹介する。「もっと自分の問題として取り扱うことができ、身近に考えることができました」「書く練習として、言いたいことを日本語で伝えるという意味で良かった」「小論文を書くことは授業で学んだことを理解するためにもとても大切だと思いますが、ときどき何を書けばいいのかなという感じでした」「小論文には自分のことを考え、書きとめられた」「小論文が5回で内容が重なっちゃって、回数を減らしてほしい」「私は論文を書かなかったのではっきりコメントできないが、基本的にとっても大事な練習だと思っています」「小論文の数は多過ぎた。2回で充分だと思う」「作文を書くのは苦手ですが、役に立ちました」「作文を書く練習になってよかった」「授業のことと私の経験したことを比較できる機会となり、よかった」「小論文の回数が多かった。いつも同じ話を書いていると感じた」「本や論文を紹介してくれればよかったと思います。本をもとに理論的に認識を高めることも大切だと思いますから」。日本人のコメントは以下の通りである。「自分の経験と結びつけて、具体的に事象を検証することはすごい良かったと思う」「書くことで頭の中の考えが整理されると思うので、みんなの書いた小論文を見てみたかったです」「何かレポートを書いたほうがより頭に残りやすいと思います。でも授業は単位がでないので書こうとする人は少ないと思います。このような授業を日本人に対しても正規の授業（単位のもらえる一般教養や総合等）で取り入れてほしいなあと感じました」「やはり考えて文字にするという作業で、留学生は考えをまとめるか、日本語力向上、授業を整理してまとめるなど、様々な力がつくと思うので、良かったと思います」「こういう体験型の授業はテストよりもレポートのほうがいいと思いました。自分たちの学びが様々なので、得たものが違うと思います」「授業に参加しただけでは感覚的には理解できるが、誰かに伝えるとなるとうまく伝えられないから、授業後に小論文を書くのは良いと思う」「小論文を書くことにより、上記のように学びを深くすると思うけど、日本人はやらなくていいと思う」

私自身の考えとしては、しっかりと授業内容を理解していれば、それに関係する体験を考えることはそれほどむずかしくはない。したがって、改善点として、授業時における話し合いに工夫をすることが挙げられる。授業中の話し合いは多く行われているが、ただ単に授業内容についてどのように感じるかといった漠然とした話し合いになりがちであったことは否めない。話し合いでは、グループの全員が授業内容に関係する実生活での経験を必ず披露するように促したり、筆者自身の体験を話したりするなどし、具体的な関連性を意識できるように授業を進めることが必要であると痛感した。また、小論文という言い方も少し固く、学生の拒否反応を招いたかもしれない。「感想文」などと言い方を改め、もう少し気楽に書けるようにする必要もあると感じた。また、絶えず筆者の意図する学習者自体の主體的な学びについて説明をし、書くことの意義を認識させることも重要であると感じた。さらに、留学生の書いた小論文にはコメントとともに評価（A～D）を付けていたが、そのことが学生にどのように書いたらいい点が取れるのかと思わせ、小論文を書く難しさを助長したかもしれない。コメントだけにして、評価はつけないというあり方もい

いかかもしれないと感じた。

6) その他(講義に関して、何か気がついたこと、改善点や要望など、何でも書いてください。)

これについては、まず学生コメントから紹介する。「野外授業もやってみたらどうですか。自分のエッセイ以外、他の人の考えがわかるように他の人のエッセイを読む機会があったらいいと思います」「自分もよく分からないが、毎回毎回この授業で何を学んだかを問われるのが好きではない。授業の内容を学んだとしか答えられないからだ。後の感想や本当の理解は時間とともに来るものなので、学んだこと+感想+自分の体験を全部まとめて作文の形にするのが難しかった。他の学生もそうだと聞いた」「例を挙げるときはある国の名前などを言わなくてもいいと思います」「授業の時の資料で、もっといろんな国の例があったらいいと思う」「楽しかったです。後期にこの授業があったらもっといいと思います」以上が留学生。「留学生と仲良くなれて良かった」「本当に良い経験だった。楽しかったけど難しいと思うこともけっこうあった。今考えると私も小論文を書いておけばよかったと思う。また、こういう機会があればぜひ参加したい。ありがとうございました」「一番心に残ったのは『青い目と茶色の目』です。あのビデオは今後もより多くの人が見たほうがいいと思います」「トランプゲームがとても面白かった」「参加型というのがとても良かったです。話をする中でいろんなことが知れるし、質問4で難点とは書きましたが、話が逸れてもそれはそれで面白かったです」「毎回楽しいテーマ、考えさせられるテーマ、いろんなテーマを用意していただいてありがとうございました。とても楽しかったです」

気楽に参加して留学生との話し合いを楽しんだ日本人学生に比べ、やはり授業として評価される留学生のコメントにはこの授業の進め方に対する戸惑いもあったようである。どのように授業の目的や狙いをしっかりと留学生に伝えていくか、またどのように実生活・体験と授業内容をつなげる視点を持たせるのかという点で、改善が必要であることがうかがえる。この点も含め、最終項で改善策を提案したいと思う。

5. アンケート結果を受けて

これらのアンケート結果から、多くの学生が体験型の授業を通し、異文化というものを見つめる視点が養われ、お互いの考え方を尊重する重要性に気がつき、よりよい人間関係を築いていく足掛かりを得ることができたと考えられる。その反面、授業の進め方や学習者主体の気づきや学びのありかたについて、戸惑いのある留学生もいることが判明した。この授業は一般的な教師主導の授業形式と大きく異なることから、授業の狙いや目的を含め、授業内容をしっかりと学習者に伝えておく必要性を痛感する。まずは、受講者に伝えるべきポイントを以下のように挙げる。

1) 参加型学習スタイル

毎回の講義では教師から受講者に一方的に伝える講義形式をできるだけ少なくし、参加者自体が授業に自ら積極的に参加する参加型学習スタイルを採用する。このスタイルでは、異なる文化に対するとらえ方・接し方についてグループ活動やグループ・ディスカッションを中心に学んでいくことになり、受講者の積極的な活動参加が不可欠となる。

2) 学習者主体による学び

教師は異文化コミュニケーションの基礎知識を題材として受講者に提供するが、それをどのように考え、実践的な学びとするかは、受講者自身による。なぜなら、受講者自身の経験や考え方、生まれ育った環境などにより、物事の捉え方や認識の仕方は千差万別だからである。受講者の異なる経験や考え方によって、授業での学びもまた異なってくる。したがって、この授業では、教師から一方的に与えられる知識を受動的に受け止めるのではなく、教師が投げかける題材について、受講者自らが考え、自己を内省し、気づきを求めていく態度が必要となる。受講者によって学びは異なり、1つの決まりきった答えがあるわけではない。教師は受講者により多くの学びや気づきを促す役目（ファシリテーター）であり、決して答え（学びや気づき）を教える存在ではない。

3) 理論を体験と結びつける実践的な学び

この授業における学びは理論や知識の暗記ではない。そのような知識や理論を実践的に役立てることにある。授業で扱う題材は受講者に気づきを促すヒントである。授業の中で話し合ったり、活動をしたりした内容について、受講者自身の経験や体験、日常における生活と関連付ける目が重要となる。理論を机上の空論としないためにも、実践的で具体的な学びとする姿勢が求められる。

4) 他者との交わりを異文化としてとらえる視点

異文化理解というと、すぐに外国や外国人のことを考えるが、異なる考え方をする人とのコミュニケーションが異文化コミュニケーションであるとすると、異文化は受講生自身の回りにもたくさん存在する。もちろん、外国や外国人はこの授業の目的となる異文化理解の原点であるが、必ずしも「それだけが異文化ではない」ことを知る必要がある。したがって、外国に一度も行ったことない人でも、日常生活において、多くの異文化を見つけることができる。そのような視点は異文化理解にとって重要である。

5) 感想文による学びの具体化

3回の講義ごとに感想文を書き、授業で投げかけられた題材を受講者の日常生活やこれまでの体験・経験とつなげる視点でまとめる。具体的であればあるほど、実践的な学びとなる。具体的な体験のともなわない、抽象論的な感想はできるだけ避ける。提出された感想文は教師のコメントとともに翌週に受講者に返す。

この5つのポイントを授業の初めに学習者にしっかりと伝え、理論だけを教える教師主導の授業ではなく、自らが主体的に学びを深めていく授業スタイルであることを理解してもらうことが重要である。これについては、一度に説明してもすべてを理解することは困難であるため、授業の中で繰り返し、伝えていくことが重要であろう。その上で、授業中のディスカッションではできるだけ具体的に学習者の実生活と関連して考えるように指示を出し、学習者の気づきや学びを具体的に意識させるように仕向ける。また、コメントにあったような話題がそれてしまうことのないように注意深くグループ討論を観察することも必要であろう。

アンケートで問題の多かった小論文については、名前を「感想文」としてもう少し気楽に書けるような形式にすることと、感想文のテーマだけでなく、キーワードなども示すことで、学習者がより具体的に自分の生活や体験とつなげることができる視点を持ちやすく

する努力をすることが必要であろう。また、他の受講者の感想文を発表するなどし、適度に学習者に刺激を与え、どのように実生活と授業とを関連させたら良いのかのヒントを与える。さらに、教師の体験やそこから感じた学びなどを披露することは学習者主体の学びをより具体的に学習者自身に描かせる助けとなるであろう。これらのことを念頭に置き、より多くの学習者が異文化理解を深め、コミュニケーション能力の向上につながるよう、さらに今後の授業の中で努力していきたいと思う。

【参考文献】

- 倉谷治賀子 (PDF文書)「中国帰国生徒の異文化適応—ジャーナル・アプローチを通して—」
倉地暁美 (1994)「ジャーナル・アプローチの展開—日本語・日本事情教育の新しい方向に向けて—」日本語教育82号
————— (1993)「異文化間コミュニケーション能力開発のために—ジャーナル・アプローチの創出とその意味」異文化間教育5 アカデミア出版会
名嶋義直 (2006)「異文化リテラシー育成に向けて—日本事情授業における取組から—」日本語教育129号

A Report on Teaching in a Cross-cultural Communication Environment with a Mixed Class of International and Japanese Students

Itsuo Harasawa

It is very important for international students to have a basic knowledge of cross-cultural communication as they must adapt themselves to their target culture if they want to be successful in their field of study in that country. The author attempted to organize a learner-centered class in cross-cultural communication situation in order to enhance students' competence in adaptation to a different culture. The class was conducted not only with the international students but also with Japanese students targeting the promotion of mutual understanding by exchanging ideas and thinking in a different culture. This paper reports how the class was organized and proposes a better way of improving class instruction after thoroughly examining lesson content along with the results of a questionnaire completed by the participants.